國際青年

2019年（令和元年）5月1日発行

第48号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International Youth Volunteers

現地レポート

■石原晴次（さいたま市）

2017年度3次隊　ミクロネシア　SV　日本語教育

四季のない国で日本語を教える

私の赴任しているザビエル高校は、南太平洋のミクロネシア連邦チューク州ウェノ島の丘の上にある。人々はこの丘を「マブチの丘」と呼んでいる。第二次世界大戦のとき馬淵建設によって建てられた日本軍の通信施設は、戦後1952年にカトリック教会のイエズス会が運営するザビエル高校として使われることになった。その後、建物は老朽化し、それを知った馬淵建設は、2008年会社の社会奉仕活動として、建物をイエズス会のカラーである白と赤を基調にした美しい建物に改修した。

ザビエル高校は、１年生から４年生まで約200人の男女の生徒がおり、ミクロネシア連邦だけでなく、隣のマーシャルやパラオなどから優秀な生徒が学びに来ている。これらの国の大統領を輩出しているエリート校である。

ザビエル高校では、第２外国語としての日本語を２年生と３年生は必修科目として、４年生は選択科目として学んでいる。誰もが経験したことであるが、第２外国語にはあまり楽しい思い出がない。実際に使う機会もほとんどない。そんな位置づけの日本語教育だが、日本語教師として生徒たちに残してあげられるものは何だろう。これらの学生が日本や日本の文化に興味を持ち、文化そのものである日本語を学ぶことで、日本とこれらの生徒たちの国々との絆を強めることに貢献できればと思っている。生徒たちが、将来日本語をもっと勉強したいと思ってくれれば、それに勝る喜びはない。そのためには、日本語の授業は楽しかったという思い出を残してあげなければならない。最低限の日本語知識とスキルを身につけさせてあげなければならない。

ミクロネシアは常夏である。カトレアやブーゲンビリア、火焔樹など美しい花が一年中咲いている。美しいが四季がないので変化がない。日本の文化は、四季の移り変わりの影響を強く受けている。四季のない国々の生徒たちに、日本の文化の本質を伝えるのは容易なことではなさそうである。

（2018/9/11）

48号目次

・現地レポート……１～３
・派遣国一口知識　その①……２
・新入会員のご紹介……３
・2018（平成30）年度壮行会……４・５
・家族連絡会……５・６
・コラム“西川材の箸セット”……６
・出前講座……６・７
・事務局便り……８

派遣国一口知識 その①

ミクロネシア連邦

■概要

面　　積：700㎢（奄美大島とほぼ同じ）
東西3200km南北1200km
チューク（トラック）、ポンペイ（ポナペ）、ヤップ、コスラエ等607の島

人　　口：105,544人（富士見市よりちょっと少ない）　2017年

首　　都：パリキール

言　　語：英語（公用語）ほか8言語

宗　　教：キリスト教

主要産業：観光業　農業

輸 出 品：マグロなど魚介類、ビートルナッツなど

■日本との関係は

1920年～1945年　日本の国際連盟委任統治領

1979年　自治政府発足
初代大統領　日系　トシヲ ナカヤマ氏

1991年　国連加盟

主要援助国　米国　日本

■協力隊は

1989年　青年海外協力隊派遣開始

	派遣中	帰国者
協力隊	11人	342人
シニア	9人	75人

（出典：外務省、JICA海外協力隊ホームページなど）

※ここでは、派遣国の簡単な情報を、できる限りわかりやすく紹介したいと思っております。

■伊藤有未（三郷市）
2018年度1次隊　トンガ　JV　コミュニティ開発

トンガ王国で生活習慣病対策

南太平洋の小さな島国トンガ王国。空港を降り立ち目に入るのは、中古の日本車の多さです。車に貼られたシールや企業名もそのままで、トンガにいるのに日本を感じる不思議な感覚です。親日国とも言われ、珠算や日本語教育が広く普及しています。何よりトンガの人々は、外見も内面もとてもおおらかです。そんなトンガを含む大洋州諸国では肥満問題が深刻化しています。私は農業・食料・林業省（日本の農林水産省にあたる）エウアオフィスの女性開発部署に配属され、人々の食生活を中心に糖尿病や高血圧等の非感染性疾患（以下NCDs）の対策に取り組んでいます。

現地に適した対策は何か、日本の知識や方法が絶対とは限らないので、赴任して半年間「市場の農作物調査」、「女性グループを対象とした意識実態調査」に注力し、現地を知ることから解決策を探ることにしました。

2月中旬には、フィジー共和国の首都スバにおいて開催された「JICA大洋州NCDs広域在外研修」に参加しました。大洋州10カ国からJICA海外協力隊とそのカウンターパート（以下C/P）、総勢36名が参加しての研修は、各国のNCDs対策の事例紹介や予防への取り組みを共有する他、NCDs対策に注力する機関訪問、最終日には隊員の実例を用いたケーススタディ分析・研究、C/Pと今後の活動のアクションプランを考え、発表し合うといった内容でした。

参加者の中で農業省配属は私たちのみという理由から、「大洋州の農業省の先駆けとなり、NCDs対策のモデルとなる」とのビジョンも浮かびました。理想が高すぎるかもしれませんが、気持ち新たに活動を軌道に乗せたいという想いが強くなりました。

帰国まで１年のカウントダウンが始まり、自身の無力さと活動への焦りを感じることも事実ですが、今後はトンガの人々と共に、トンガタイムに柔軟に対応しながら、家庭菜園の定着化、栄養バランスを考慮した食生活の改善、ヘルスチェック等、農業省なりのアプローチでNCDs対策に取り組んでいきます。　(2019/3/13)

■長友郁美（桶川市）
2018年度３次隊　モロッコ　JV 料理

派遣国紹介

１月29日、日本を出国してモロッコに到着してから、もう２か月が経とうとしています。私たちボランティアは首都で約１か月のホームステイや語学研修等の現地訓練を終えて、それぞれの任地へ向かいました。

首都に到着して思ったこと。ラバトは想像以上に都会でした。街中を走るトラム、スーパーマーケットやショッピングモールは清潔で品揃えも豊富です。電気やインターネットで困ることはなく、快適に過ごせます。

朝晩は気温が下がり、少し冷えますが昼間は雨が降ることはめったにありません。日中は日差しが厳しいですが、湿度がないため日陰はとても心地よく感じます。この気候のおかげで果物がとても美味しいです。特にオレンジは安い上に甘いので水分補給代わりに食べることもあります。

モロッコの主食はパンで、ダリジャ（モロッコ方言アラビア語）で「ホブス」と呼ばれるパンはお店に入ると料理によく付いてきます。平べった

く中身がギュッと詰まったホブスがモロッコの人は大好きのようです。半分に切って中に野菜や肉を入れればサンドイッチの出来上がりです。このサンドイッチはスーク（市場のような場所）で５～10DH（日本円で60～120円程度）で食べることが出来ます。

モロッコの方は本当に人懐っこく、通りすがりに知らない人に「マルハバ！」（ようこそ！という意味）と声をかけられることや、目が合うとニコッと微笑んでくれることがよくあります。親切というか世話好きというか、「どうしてそこまで私に良くしてくれるの？」と思ってしまったほどです。困っている人を放っておけない人が多いようです。

まだまだモロッコと日本の違いに戸惑うことも多いですが、１日も早く生活に慣れて活動に専念していきたいと思います　(2019/3/19)

新入会員のご紹介（47号発行以降入会の方）
（個人会員）
宮 岡 孝 二（日高市）
宮 岡 令 子（日高市）
浅 倉 純 一（さいたま市）
小 島　 昇（さいたま市）

入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。是非お知り合いをご紹介ください。申込書などは事務局に用意してあります。お気軽にお問い合わせください。

【年会費】
①個人会員：一口　3,000円
②団体会員：一口　10,000円
③法人会員：一口　20,000円
④寄　　付：大歓迎

★ 2018（平成 30）年度壮行会

■ 3 次隊壮行会

- 2018（平成 30）年 12 月 18 日（火）
- 埼玉県知事公館
- 埼玉国際青年を育てる会・青年海外協力隊
  埼玉県ＯＢ会の共催

冬晴れの好日、今回も知事公館において埼玉県主催の親善大使委任式に引き続き、壮行会を開催しました。公的行事から開放されてすっかりリラックスした初々しき派遣隊員を２階中会議室に迎え、本会の榎本敬常任理事（青年海外協力隊埼玉県 OB 会長）による司会の下、壮行会の幕が開かれました。本会星野和央会長による主催者挨拶に引き続き、埼玉県県民生活部国際課竹澤幸一主幹からは、埼玉親善大使としての活躍を期待するとの激励の言葉が、そして、JICA 東京センター市民参加協力担当長谷川敏久次長からは、安心して心配せず着任をとの温かき言葉、続いて、一般社団法人協力隊を育てる会大石精一事務局長からバッジ・シンボルマークの由来等を教えていただきました。次に、早や傾きかけた柔らかな陽を受けた窓際に並んだ 12 名の隊員から、「子どもたちの衛生環境改善に役立ちたい、PC の教育プログラムを進めたい、看護師として衛生の概念を伝えたい、日本料理を伝えたい、アマゾンでの野菜栽培のきっかけを創りたい、柔道ナショナルチームを指導し東京オリンピックに出場させたい」等々、一人ひとり派遣後の抱負が熱く語られました。

今回の派遣は、青年海外協力隊のみ 12 名。半数がアフリカ大陸、そしてアジア 3、南米 2　オセアニア 1 名。職種は、PC インストラクター、青少年活動、美容師、コミュニティ開発、理科教育、料理、看護師、野菜栽培、環境教育、柔道と、様々。

さて、本会瀬島孟副会長の乾杯の発声のあとは、今回も楽しい懇談の時です。現地で役立つ持ち物

から帰国後の就職のことまで、具体的な話から心構えまで。オレンジジュース片手に、真剣な表情で OB からの助言に耳を傾けていました。派遣後の糧となるに違いありません。熱い空気につつまれた真冬の壮行会は、今回も隊員 OB など 7 名からの自身の体験に基づいた激励の言葉、そして隊員代表の決意の言葉をもって閉会となりました。12 名の絆は派遣中そして帰国後も強く永く続くことでしょう。　（小島章裕）

■ 4 次隊壮行会

- 2019（平成 31）年 3 月 22 日（金）
- 埼玉県知事公館
- 埼玉国際青年を育てる会・青年海外協力隊
  埼玉県OB会の共催

全国各地から桜の開花便りが届きはじめ、知事公館庭のしだれ桜もほぼ満開に咲く日、埼玉県主催の埼玉親善大使委任式に引き続き、今回も知事公館２階中会議室において壮行会を開催しました。

今回はガーナ・PC インストラクター、エクアドル・環境教育に各１名づつ派遣という少人数の派遣隊員でしたが、最近派遣先から帰国したばかりの13名の帰国報告者隊員を迎え、本会の榎本敬常任理事（青年海外協力隊埼玉県 OB 会長）による司会進行で壮行会が進められました。

本会星野和央会長は、埼玉県の親善大使として埼玉県の事をよく理解して赴任していただきたいと挨拶されました。

引き続き、埼玉県県民生活部国際課小川美季副課長は、埼玉親善大使レポートへの投稿のお願い、JICA 東京センター市民参加協力第一課杉村悟郎課長からは、派遣隊員への励ましの言葉として埼玉県は親善大使委任式と壮行会が同一会場で開催される一体感が素晴らしいとお褒めの言葉がありました。

又、(一社) 協力隊を育てる会大石精一事務局長からは、壮行会での派遣隊員へ西川材を使用した箸を贈呈する企画に敬意が表されました。

次に、派遣隊員より自己紹介と抱負が語られました。

続いて、本会瀬島孟副会長の乾杯発声後、恒例の懇親会となり帰国報告者隊員及び協力隊 OB 会の皆様含めて、出席者全員で和やかに歓談がなされました。

懇親会終了後、帰国報告者隊員、協力隊 OB 会員から激励の言葉やアドバイスをいただきました。「自分が現地の人々を支援しているのではなく、実は自分が現地の人々に支援され、成長しているのだと気づかされてから、派遣先の皆さんと真のコミュニケーションが図れるようになり、周りから感謝され、自信につながり、得るものが多くなった」との言葉が印象的でした。

最後に、帰国報告者隊員、OB の皆さんも含め記念撮影をして壮行会が閉会となりました。

（川嶋　清）

★家族連絡会

2018 年度 埼玉県 JICA ボランティア 家族連絡会・活動報告会

2018（平成30）年11月23日（金） 埼玉会館（さいたま市）
主催：独立行政法人国際協力機構（JICA）
　　東京センター
共催：青年海外協力隊埼玉県 OB 会
　　埼玉国際青年を育てる会

例年は 2 月に行われていた家族連絡会が本年度は 11 月に開催されました。家族参加は 33 名で、他に協力隊参加希望者など一般参加が 13 名ありました。

プログラムは 2 部構成で進められ、1 部は埼玉県県民生活部国際課小川美季副課長、埼玉県青年海外協力隊 OB 会榎本敬会長、埼玉国際青年を育てる会星野和央会長より挨拶があり、JICA 海外協力隊の概要、支援体制、帰国後、視察の旅の紹介がありました。その後質疑応答があり 2 部の活動報告へと進みました。

3 名の協力隊経験者が、パワーポイントを使って講演した後、新しい試みとして主催者の問いかけに答える形でのご家族の発表がありました。

その後、活動報告をされた人を囲んで座談会が行われました。

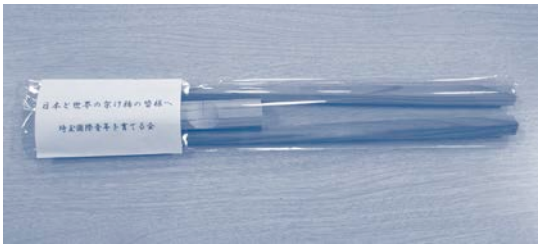
『毎日海に潜って海中の熱帯魚を見ている息子

が帰国後日本で社会復帰できるかが心配だ』とか、ご両親が息子さんの任地を訪問し、『危険地域の生々しいニュースや報道とは違って住まいを訪れる日本人の多さを知った』など。またJICA海外協力隊参加希望の青年は漠然とした進路の不安を感じ、協力隊に参加したメリットを聞いていました。これに対し、日本ではありえない機器の整備不良、備品不足を工夫して乗り越えたこと、また人との関係が広がり多くを学んだこと、そして日本でもこの経験は役に立つであろうと答えていました。

今回は一つの会議室の中で行われたので、座談会の様子が一目でわかり、各グループの雰囲気がすぐつかめました。それぞれの輪に参加した人たちは、重たい話題にも正面から向かい合い、また楽しいことなども聞いて笑顔で参加していました。

（大野信一）

日本と世界の架け橋になる皆様へ
飯能市の西川材を使った箸セット贈呈



2017（平成29）年度より、埼玉国際青年を育てる会では、「埼玉親善大使」として委嘱される青年海外協力隊員に、壮行会の場で埼玉県飯能市の西川材を使った「箸セット」を贈呈しています。さて、これから海外で活躍する隊員になぜ箸なのか。それも、不思議な五角形の箸の意味するものとは。

その１は「郷土埼玉が誇る歴史ある西川材であること」江戸時代、材木の需要が非常に多かった江戸に、入間川、高麗川、越辺川に筏を組んで、現在の飯能市、日高市などの地域から大量の木材を運んできたことに由来します。つまり、江戸の西方から川を下ってきた材木という意味です。その２は「日本と世界の架け橋（箸）」になってほしいという言葉遊び。そして、その３は「五角形は、五大陸」を表したものです。本会は、このような意味を込めて、飯能市で西川材関連の活動をしておられる方からこの不思議な箸を取り寄せて、世界に旅立つ隊員にプレゼントしております。それぞれの任地で、この箸の意味を熱く語る隊員の姿が目に浮かびます。　（川嶋　清）

国際協力出前講座

国際貢献ってどんなことなの？
－協力隊で活躍した方から聞いてみよう－

青年海外協力隊やシニア海外ボランティアとして海外で活動してきた隊員を講師に招いて、派遣された国での体験を語ってもらおうという要請が増えてきました。当会では活動の一つとして、小・中学校、公民館などの出前講座を活発にコーディネートしています。2018年度に行われた出前講座を紹介いたします。

■ 2019（平成31）年３月７日（木）
戸田市立戸田第二小学校

戸田市立戸田第二小学校は、本会の出前講座をここ数年利用してくれる常連校で担当者も慣れ親しんでいる学校です。当日はあいにくの雨でしたが、学校応援団お礼の会が開催されたようで、卒業・進級を前にしたあわただしさの中にも喜びあふれる子どもたちの笑顔に触れることができました。

●講師：藤木有美さん
（平成20年度２次隊　モンゴル　JV　理科教師）

モンゴルの青い民族衣装と毛皮の帽子をかぶって子どもたちの前に登場した藤木さんは、モンゴルのウランバートルの小学校で理科の教師として活動してきました。

はじめに、青年海外協力隊や協力隊参加の動機についてお話されました。その後、モンゴルでの生活（衣食住）や現地の小学校の様子をたくさんの映像を使いながら紹介し、日本との違いやその国の生活ぶりを６年生の子どもたちにわかりやすく楽しく説明してくれました。そして、２年間の生活の中で「楽しかったこと・うれしかったこと」「悩んだこと・大変だったこと」「学んだこと」等について、自分の思いを話してくれました。その中でも「学んだこと」について藤木さんから子ども

たちへ、「周りの人を大切に　感謝　言葉で思いを伝える」「ものより人に頼る」「当たり前はみんな違う」「今の一歩一歩を大切に」等の言葉かけがありました。「何事も自分の目と耳で知ること、手を動

かすこと、周りの人を大切にすることや、国際協力とは自分の周りの人を大切にする（きにかけてあげる）ことなのです。みなさんも今自分のいる環境から学んでくださいね」という言葉は、小学校卒業を間近に控えた６年生にぴったりな言葉でした。また、子どもたちの質問に対して、青年海外協力隊員は、国の違いを知り現地の人と協力し合っての援助活動をすることがとても大切ですよとお話されました。

●講師：佐藤恵利さん
（平成28年度３次隊　サモア　JV　日本語教育）

出前授業は初めてということで少し緊張した様子で授業が始まりました。

はじめに、日本語指導とはどういう仕事なのかを説明し、日本語はとてもむずかしい言葉ですがルールがあるということ等を、カードを使った教え方を披露すると、子どもたちから「なるほど」という感嘆の声があがりました。

続いて、JICA ボランティアについて説明され、自分が現地で取り組んだ仕事（大学での日本語指導、小学校へ出向いての日本語教室、日本文化の紹介等）について、たくさんの映像を使用して紹

介してくれました。また、子どもたちは、サモアという国の説明に熱心に耳を傾けていました。特に、壁のない住まい、日本と同じように刺身を食べる、日曜日は教会に行って昼食後は寝て過ごすといった生活習慣等についは驚きの声があがりました。また、サモアの人たちの持つ日本のイメージは、寿司、アニメ、HONDA といった程度で、日本についてはほとんど知らず、日本は中国のどこにある？という感覚だと伝えられると、驚きの表情をした子どもたちが何人も見られました。サモアという国は南国の島程度としか理解していなかった子どもたちにとって佐藤さんからのお話は新鮮であり、とても興味のある内容でした。

最後に佐藤さんは、「青年海外協力隊員は、上からの視線ではなくその国の文化を共有する視線（シェアすること）が大切であり、そうすることによってその国の人たちとの理解が生まれ仲良しになれる（わかりあえる）んです。相手を理解することは相手と同じ立場で接することですよ」と感想を話されていました。

６年生４クラスを２つのグループに分け、それぞれ２回ずつ、２人の講師の方にお話をしていただきました。社会科の授業の「国際貢献ってどんなことなの　青年海外協力隊で活躍した人から聞いてみよう」という学習が終了していたので、子どもたちも熱心に２人の講師のお話を聞いてくれました。お話の後には子どもたちからたくさんの質問がありました。また先生方からは、「たくさんの質問に丁寧に答えていただき、子どもたちも知りたいことを知ることができ満足したようです」「子どもたちの声から海外青年協力隊員の活動への理解が深まったり、海外に興味を持ったりする児童が増えたようです。また、お話を聞き、海外で活躍する仕事に興味を持っている児童にはとても良い刺激になりました」との感想をいただきました。　（黒須琢也）

埼玉国際青年を育てる会「ホームページ」活用のお願い

2016年4月1日付で埼玉国際青年を育てる会「ホームページ」を移設して、3年が経過しました。

日ごろの会員の皆様の積極的なご活用に感謝申し上げます。

ホームページには、「JICA東京センター」、「JICA埼玉デスク」、「協力隊OB会」等の事業開催通知を掲載しているほか、当会の「壮行会」、「定期総会」、「理事会」、「拡大常任理事会」等についても掲載しています。今後もホームページを積極的にご活用いただければ幸いです。

また、会員の皆様の「ホームページ」への情報提供をお待ちしています。

なお、ホームページのURLは以下の通りです。

http://www7b.biglobe.ne.jp/~saitamakokusaiseinen/

●会報「國際青年」に原稿・写真の提供のお願い

会報「國際青年」を毎年5月および11月に発行しており、原稿を募集しています。

- 派遣される方については、派遣先での活動の様子を原稿と写真でお寄せください。「現地レポート」として、掲載させていただきます。タイトルを含め、原稿の字数は800字程度で写真は2～3枚でお願いいたします。なお、一言コメントでも結構です。
- 留守家族の方も、家族の思いなどをメールやFAXでお寄せください。

■事務局便り

青年海外協力隊への参加と帰国後の進路

青年海外協力隊は世界91カ国で52,918名の活動実績（2018年12月末現在）があり現在も70カ国以上で2,335名が活動中である。さて、その青年海外協力隊への参加と帰国後の最近の進路状況は次のとおりである。2013年度応募者は多い順に①民間企業・団体33％ ②学生19％ ③その他14％ ④無職10％ ⑤独立行政法人等9％ ⑥公務員8％ ⑦教員6％であり、帰国した2016年度の状況は多い順に①民間企業28％ ②現職復帰20％ ③独立行政法人等13％ ④進学8％ ⑤教員7％ ⑥JICA関係6％ ⑦公務員4％である。壮行会のときに派遣隊員から将来は国際機関にて仕事をしたいという希望をお伺いすることが多い。2016年度帰国者の進路として国際機関は1％である。様々な応募者が青年海外協力隊に参加し、そして帰国後に様々な分野で活動している。帰国後の進路の希望が叶うことを願ってやまない。

（事務局長　矢部保雄）

■編集後記

広報委員長の大任を拝命し、最初に書いた編集後記が熊本地震で被災した体験でした。昨日のことのように思われますが、早いもので、あれからもう3年の月日が経ちました。平成という時代を振り返るとき、戦争の無かった平和な時代と評価される一方、天災に苦しめられた時代としても記憶されることでしょう。

元号は、「平成」から「令和」へと改まり、広報誌「國際青年」48号を「令和元年」初日という記念すべき日付で発行できることを嬉しく思います。「令和」の意味するところは、対外的にはBeautifl Harmony（美しい調和）と英訳されるようです。育てる会の活動が、世界に「美しい調和を実現させるささやかな一助になることができればと願っております。

埼玉国際青年を育てる会は、来年で25周年の節目を迎えます。この間本誌では、赴任していく隊員たちを見送る壮行会や、世界の国と地域で活躍する隊員たちの情報を紹介してきました。また、帰国した隊員の方々が小・中学生にその体験を語る「出前講座」の模様、そして隊員の家族や地域の人たちの思いも取り上げてきました。今後、新たに「派遣国一口知識」や協力隊に因んだ「コラム」など、さらに内容を充実していく所存です。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

（広報委員長　中島美都里）

・発　行：埼玉国際青年を育てる会
・編　集：広報委員会
・事務局：埼玉県鴻巣市下谷1576
矢 部 保 雄
TEL・FAX 048-543-1355
E-mail：yasuo.y08@gmail.com
・http://www7b.biglobe.ne.jp/~saitamakokusaiseinen/